

I. 報告事項

1. 平成 17 年度事業報告および平成 18 年度事業計画（杉山雄一会長）

1-1) 平成 17 年度事業報告

A. 庶務報告

1. 会員の動向

(1) 会員数(平成 17 年 12 月 31 日)

正会員	1,760 名
学生会員	436 名
名誉会員	15 名

合計会員数 2,211 名

賛助会員 74 社

購読会員 31 社

(2) 名誉会員の推薦

新名誉会員 2 名

(3) 評議員推薦

新評議員 7 名

評議員数(平成 17 年 12 月 31 日) 205 名

2. 会議の開催

(1) 理事会

第 59 回:平成 17 年 1 月 28 日(金)、第 60 回:平成 17 年 6 月 2 日(木)、

第 61 回:平成 17 年 8 月 5 日(金)、第 62 回:平成 17 年 9 月 29 日(木)、

第 63 回:平成 17 年 10 月 21 日(金)

(2) 評議員会・総会

平成 17 年 10 月 22 日(土)

B. 事業報告

1. 会誌「Drug Metabolism and Pharmacokinetics」の発行

Vol.20 No.1(平成 17 年 3 月 1 日) 90P

Vol.20 No.2(平成 17 年 5 月 1 日) 62P

Vol.20 No.3(平成 17 年 7 月 1 日) 73P

Vol.20 No.4(平成 17 年 9 月 1 日) 83P

Vol.20 No.5(平成 17 年 11 月 1 日) 82P

Vol.20 No.6(平成 18 年 1 月 1 日) 114P

C. 講演会等の開催

1. 第 19 回日本薬物動態学会ワークショップ

平成 17 年 4 月 14 日(木)～15 日(金) 昭和大学・上條講堂

代表世話人:小林 智

2. 20th JSSX MEETING / 13th NA ISSX 合同学会

平成 17 年 10 月 23 日(日)～27 日(木) Wailea Marriott Resort

日本側 Co-chair:鎌滝哲也

D. 他学会への協賛等

1. 3rd World Conference on Drug Absorption, Transport and Delivery: Clinical Significance and Regulatory Impact (後援)
平成 17 年 4 月 18 日～20 日・スペイン
2. HAB 研究機構学術年会 (協賛)
平成 17 年 5 月 19 日～20 日・東京
3. 共立薬科大学国際シンポジウム (後援)
平成 17 年 6 月 9 日・東京
4. 構造活性フォーラム 2005 (協賛)
平成 17 年 6 月 28 日・大坂
5. 第 32 回日本トキシコロジー学会学術年会 (共催)
平成 17 年 6 月 29 日～7 月 1 日・東京
6. 第 32 回 BMS コンファレンス (共催)
平成 17 年 7 月 3 日～6 日・北海道
7. 第 21 回日本 DDS 学会 (協賛)
平成 17 年 7 月 22 日～23 日・長崎
8. Chem-Bio Informatics in Post Genome Era (協賛)
平成 17 年 8 月 24 日～25 日・神奈川
9. 第 7 回製剤研究フォーラム (協賛)
平成 17 年 9 月 16 日・東京

E. 賞の授与

1. 日本薬物動態学会学会賞
 - ・石川智久 (東京工業大学大学院生命理工学研究科)
題目「ヒト ABC トランスポーターのファーマコゲノミクスと創薬・薬物動態研究への応用」
 - ・林 正弘 (東京薬科大学薬学部薬物動態制御学教室)
題目「薬物の腸管膜透過に関する機構論的解析」
2. 日本薬物動態学会奨励賞
 - ・加藤基浩 (中外製薬株式会社前臨床研究第 1 部)
題目「生理活性ペプチドの非線形体内動態機構および文献情報によるヒト体内動態予測」
 - ・矢野育子 (京都大学医学部付属病院薬剤部)
題目「薬物動態と薬効の速度論的解析に基づく個別投与設計法の確立」
 - ・山崎浩史 (昭和薬科大学薬物動態学研究室)
題目「日本人の薬物酸化酵素活性の個人差の研究」
3. 日本薬物動態学会功労賞
 - ・須賀哲弥 (青森大学薬学部)
題目「薬物の代謝および毒性発現におけるペルオキシソームの関与」

F. その他

1. 第 9 期理事選挙の実施

1-2) 平成 18 年度事業計画

A. 会議

総会、理事会、評議員会及び各種委員会の計画は次のとおりである。

1. 評議員会・総会
通常総会は平成 18 年 11 月 29 日から開催される第 21 回年会の会期中に開催し、平成 17 年度事業報告、収支決算、平成 18 年度事業計画及び平成 19 年度収支予算、その他の運営上必

要な議案を審議の上議決する。

2. 理事会

理事会は年 5 回(1 月、5 月、8 月、10 月、年会時)開催予定。

3. 各種委員会

平成 18 年度組織されている委員会は以下の通りである。それぞれの委員会は必要に応じ開催し、それぞれの課題について審議の上、理事会に提案・具申し承認事項を随時実行に移す。

- (1) 総務委員会(委員長:寺崎哲也)
 - a) 会員増を考える委員会(委員長:横井毅)
 - b) ビジョン委員会(委員長:鈴木洋史)
- (2) 財務委員会(委員長:小林 智)
- (3) 編集委員会(委員長:千葉 寛)
 - a) DMPK 編集委員会(委員長:千葉 寛)
 - b) NL 編集委員会(委員長:山崎浩史)
 - c) DMPK 電子投稿 WG(WG 長:小澤正吾)
 - d) DMPK ベストアクセス賞選考を考える会(委員長:小田切優樹)
 - e) DMPK 国際化委員会(委員長:川合良成)
- (4) 国際対応委員会(委員長:玉井郁巳)
- (5) 広報委員会(委員長:乾 賢一)
 - a) HP 改革委員会(委員長:成松鎮雄)
- (6) 教育委員会(委員長:横井 毅)
 - a) ショートコース委員会(委員長:岩崎一秀)
 - b) 若手研究者活性化委員会(委員長:池田敏彦)
 - c) ベストポスター賞選考方法検討委員会(委員長:池田敏彦)
- (7) 薬物動態試験推進委員会(委員長:池田敏彦)
- (8) フォーラム委員会(委員長:山下伸二)
- (9) 運営委員会(委員長:杉山雄一)
- (10) 学会賞選考委員会(委員長:山添 康)

B. 事業計画

平成 18 年度に実施する集会、出版、及び表彰の各事業は、次の計画により行う。

1. 集会事業

次の集会事業を行う予定であり、各計画を実施するに当たっては各事業を担当する委員会において具体的計画を立案する。

- (1) 第 20 回日本薬物動態学会ワークショップ
平成 17 年 4 月 13 日(木)～14 日(金) 昭和大学・上條講堂
代表世話人:三輪哲生
- (2) 日本薬物動態学会第 21 回年会
平成 17 年 11 月 29 日(水)～12 月 1 日(金) 江戸川区総合区民ホール
第 21 回年会長:池田敏彦
- (3) フォーラム 2006
日本薬物動態学会第 21 回年会会期中 江戸川区総合区民ホール
フォーラム委員長:山下伸二

(4)若手研究者シンポジウム

日本薬物動態学会第21回年会会期中 江戸川区総合区民ホール
Co-chair: 前田和哉、小林カオル

2. 会誌などの発行業務

- (1)会誌「Drug Metabolism and Pharmacokinetics」およびニュースレターの発行
Vol.21 No.1～No.6 の合計6冊
- (2)書籍「創薬動態」の発行(レクチャーノートの単行本)
平成18年11月発刊予定
編纂:玉井郁巳、笠井英史、鈴木洋史、千葉雅人

3. 表彰および奨励事業

- (1)日本薬物動態学会学会賞各賞(学会賞、北川賞、奨励賞、功労賞)の表彰
- (2)DMPK三賞(編集委員が選ぶ最優秀論文賞、ベストダウンロード論文賞、ベストサイテーション論文賞)の表彰
- (3)名誉会員の推挙

C. その他

本学会の目的に対して必要と認められる事業を行う。それらの実施に関してはその都度、理事会又は評議員会で立案、計画実施する。

2. 平成18年度学会賞等の選考経過および結果報告、学会賞等推薦募集要項の記述変更について(山添 康選考委員長)

2-1)学会賞等選考結果報告

日本薬物動態学会細則並びに学会賞等選考規定に基づいて、平成18年7月11日に選考委員会を開催し、厳正かつ総合的に審査した結果、平成18年度学会賞(2件)、奨励賞(3件)、北川賞(1件)のそれぞれ受賞候補者を下記のように選定し、理事会に上申した。理事会で承認され、平成18年度学会賞各賞の受賞者が下記の通り決定した。(各賞50音順)

なお、功労賞については推薦候補の申請がありませんでした。

学会賞受賞者

- 池田 敏彦(三共株式会社薬剤動態研究所)
研究題目「新規な薬物代謝反応および代謝酵素機能に関する研究」
- 後藤 順一(東北大学病院)
研究題目「薬物動態基盤解析法の構築とその応用に関する研究」

北川賞受賞者

- 岩崎 一秀(ファイザー株式会社中央研究所)
研究題目「新薬開発における薬物動態研究の重要性」

奨励賞受賞者

- 加藤 将夫(金沢大学大学院自然科学研究科)
研究題目「トランスポーター・アダプター分子群による薬物動態制御」
- 川上 茂(京都大学大学院薬学研究科)
研究題目「糖修飾リボソームによる細胞選択的遺伝子ターゲティングシステムの開発」
- 楠原 洋之(東京大学大学院薬学系研究科)
研究題目「腎尿細管、血液脳関門において取り込みおよび排出に働く薬物トランスポーターの分子実体と機能の比較論的解析」

2-2) 学会賞等候補者推薦書(募集要項)の記述変更について

日本薬物動態学会では、学会賞、北川賞、功労賞および奨励賞を設けています。

① 対象となる候補研究題目

いずれの賞においても、対象となる候補研究題目は、他の学会等で過去に受賞対象となっていないこと(他学会で受賞されたものと同一タイトルであってはならないという意味です)。明確にするため、括弧内を追記。

② 特許出願後の学术论文の提出について

4つの賞の受賞基準に基本的な変化はありませんが、個々の賞の性格を明確にするため、下記の記述の一部を変更しました。

具体的には学术论文と共に特許を業績として評価することにより変わりありませんが、特許出願後に学术论文として公表する場合もあるので、特許の項には関連論文の有無についての記述を加えました。

奨励賞については、候補者本人が主体となって行った研究業績の内容が明確にわかるように推薦書に記載していただくようお願いいたします。

変更箇所は下記表の追加1および追加2部分です。

1. 学会賞、奨励賞

番号	評価項目	提出書類	備考
1		推薦書(学会所定用紙)	
2		推薦理由書(A4,形式自由)	・学会賞:4000字 ・奨励賞:2000字
3	研究業績	代表的な報文5報以内の別刷	・コピー可 ・当該研究に直接関係のあるもの
		研究業績目録	・各論文のインパクトファクター、被引用件数を付記 ・別刷添付の5報に 追加1
4	本学会への貢献	学会発表(シンポジウム・口頭・ポスター)、WS発表、学会誌投稿	・ベストポスター賞
5	特許		追加2
6	招待講演(国内、国外)		・国内、国外に分けて記載
7	研究費獲得状況		・学会賞:代表、分担 ・奨励賞:代表のみ

2. 北川賞

番号	評価項目	提出書類	備考
1		推薦書(学会所定用紙)	
2		推薦理由書(A4,形式自由)	4000字
3	薬物動態学研究における啓蒙活動	代表的な報文5報以内の別刷	・コピー可 ・当該研究に直接関係のあるもの
		研究業績目録	・各論文のインパクトファクター、被引用件数を付記 ・別刷添付の5報に
4	本学会への貢献	学会発表(シンポジウム・口頭・ポスター)、WS発表、学会誌投稿	・ベストポスター賞
5	特許		追加2

追加1: 別冊添付以外に、研究題目に直接、関連する業績10編を選び、*を付記

追加2: 関連する論文業績があれば付記

3. 総務委員会報告（寺崎哲也委員長）

（副委員長：高野幹久、委員：細谷健一、湯浅博昭、荻原琢男）

① 会費滞納会員の除籍に関するルール化について（理事会承認事項）

審議結果に基づき作成した「会費滞納会員の除籍に関するルール案」が、第 67 回理事会で承認された。本件に関連して、下記の「細則」の改定が理事会で承認され確定した。「ルール」の具体的内容については、薬物動態学会ホームページに公開するとともに、DMPK 誌に News Letter として投稿した。（2006 年 6 号掲載予定）なお、本制度は、2007 年 1 月 1 日から適用する。

【正会員及び学生会員の資格喪失に関する内規】

第 1 条 正会員ならびに学生会員が、会費を滞納したとき、当該期間の学会誌 (Drug Metabolism and Pharmacokinetics) の送本が停止され、会費納入督促状が送付される。

また、年会、ワークショップの参加は非会員扱いとなる。

第 2 条 正会員ならびに学生会員が「退会届」を提出する際、当該期間の会費を納入する必要がある。ただし、学生会員は 1 年間の「退会届提出猶予期間」が認められる。この猶予期間を越えて学生会員が「退会届」を提出するとき、猶予期間の会費を含む未納分会費全額の納入を必要とする。

第 3 条 正会員ならびに学生会員が、会費を 3 年間滞納したとき除籍され、会員の資格を喪失する。

第 4 条 除籍された元会員が再入会をするとき、当該期間会費、及び滞納会費の納入を要する。

第 5 条 第 2 条、第 3 条、及び第 4 条は理事会で審議し、これを承認する。

第 6 条 その他、特別な措置を要するときは、別途、理事会で協議する。

新評議員の推挙について（評議員会承認事項）

評議員選出および資格に関する規定（細則 3）に従い、推薦のあった候補者について総務委員会で推薦資料に基づいて予備審査した。予備審査の結果、下記 12 名を理事会に推挙し、第 67 回理事会において承認された。なお、「評議員の選出」は評議員会での承認によって確定する。

	氏名	所属・部署名	所属先役職	会員歴	推薦者
1	麻生 良典	中外製薬株式会社 研究本部前臨床研究部	部長	20 年	大塚 峯三
2	家入 一郎	九州大学大学院 薬学研究院	助教授	11 年	樋口 駿
3	大槻 純男	東北大学大学院 薬学研究科	助教授	5 年	寺崎 哲也
4	桂 敏也	京都大学医学部附属病院 薬剤部	助教授 副薬剤部長	9 年	乾 賢一
5	木村 敏行	北陸大学 薬学部	助教授	5 年	山本 郁男
6	出口 芳春	帝京大学 薬学部	教授	13 年	玉井 郁巳
7	埴岡 伸光	岡山大学大学院 医歯薬学総合研究科	助教授	11 年	成松 鎮雄
8	馬場 隆彦	塩野義製薬株式会社 新薬研究所	部門長	20 年	成松 鎮雄
9	布施 英一	協和発酵工業株式会社 医薬研究センター薬物動態研究所	所長	12 年	杉山 雄一

10	三浦 慎一	三共株式会社 薬剤動態研究所	主席研究員	6年	池田 敏彦
11	宮田 康行	小野薬品工業株式会社 薬物動態研究所	所長	2年	杉山 雄一
12	湯川 栄二	第一薬科大学 臨床薬剤学	教授	15年	樋口 駿

名誉会員の推挙について（評議員会承認事項）

池田敏彦理事から黒岩幸雄氏（昭和大学名誉教授、元昭和大学薬学部長、75歳）、乾 賢一理事から渡邊 淳氏（愛知学院大学薬学部・薬学部長、名古屋市立大学名誉教授、70歳）の推薦があった。総務委員会で予備審査し、両氏とも名誉会員に相応しいとして、11月7日開催の持ち回り理事会に推挙し、両氏を名誉会員として評議員会へ推挙することを決定した。なお、「名誉会員」は評議員会の承認によって最終決定する。

薬物動態学会会員の休会制度ならびに海外在住届制度の導入について（一部、評議員会及び総会の承認事項）

審議に基づいて、下記の「会則の改定案」と「細則の改定案」を作成し、10月23日開催の持ち回り理事会で承認された。「細則」の改定は理事会決定事項であるが、「会則」の改定は総会と評議員会の承認が必要である。最終的に承認された場合、本制度は2007年1月1日から適用予定であり、詳細な内容は、News Letterに掲載予定である。（2007年1号掲載予定）

「会則の改定」

【第三章 会員】

第11条 正会員及び学生会員は、別途定める事由に該当したとき、届出に基づいて会長は休会を認めることができる。

「細則の改定」

【正会員及び学生会員の休会及び海外在住届に関する細則】

第1条 「海外留学」「海外勤務等」「長期病気療養」「出産・育児休暇」の場合、2年間に限り休会を認める。別途定める「休会届」を提出し、総務委員会で審議し、承認する。

第2条 休会期間中の会費の納入を免除する。再入会をする時、休会期間中の会費の納入は必要としない。

第3条 休会期間中は「非会員」扱いとする。機関誌の配布はしない。年会、ワークショップへの参加は「非会員」扱いとする。評議員、学会賞各賞の応募の際、休会期間は会員期間と認めない。

第4条 「海外留学」「海外勤務等」で海外に在住する会員が、別途定める「海外在住届」を提出し「会費」を納入する場合、その間の会員資格は継続する。「海外在住届」は、事務局が取り扱い、総務委員会へ報告する。

第5条 その他、特別な措置を要するときは、別途、総務委員会で協議する。

その他

日本学会会議「科学者の行動規範」等に対する調査に対する回答案を作成した。

4. 編集委員会報告(千葉 寛編集委員長)

4-1)DMPK 編集委員会報告(千葉 寛編集委員長)

編集委員:池田敏彦(第一三共)、小澤正吾(国立衛試)、川合良成(ノバルティス)、澤田康文(東京大)、須藤賢一(第一三共)、高野幹久(広島大)、山崎浩史(昭和薬大)、山田英之(九大)、湯浅博昭(名市大)

1. 電子投稿への移行について
(ア) 3ヶ月の準備期間を経て2006年4月1日から電子投稿・査読システムを正式稼働させた。現在のところ大きなトラブルは無く運営されている。
2. 投稿論文について
(ア) 10月1日現在の投稿数は52と昨年と同数であったが、電子投稿への移行に伴って海外からの原著論文の投稿数が増加し、過去4年間における海外からの投稿数を大きく上回った。
3. Editorial について
(ア) 編集委員が Editorial を交代で執筆することになり、編集委員長が DMPK 誌の国際化に向けて最初の Editorial を執筆した(第3号に掲載)。引き続き、川合、池田、小澤各編集委員が執筆し隔号に掲載することになった。
4. 新編集委員と編集委員の国際化について
(ア) DMPK 国際化委員会の川合委員長が DMPK の新編集委員として編集委員会に加わり、DMPK 国際化委員会と協力して海外からの編集委員と Editorial Board の人選を進めることになった。
5. DMPK 関連の新設三賞について
(ア) ベストダウンロード論文賞
 - ① 選考規定に従い、2002年、2003年、2004年のベストダウンロード論文賞受賞論文を選定し、結果をホームページに掲載した。
- (イ) ベストサイテーション論文賞
 - ① 選考規定に従い、2002年に掲載された論文を対象に、ベストサイテーション論文賞受賞論文を選定し、結果をホームページに掲載した。
- (ウ) 編集委員が選ぶ最優秀論文賞
 - ① 選考規定に従い、2005年に掲載された論文を対象に、編集委員が選ぶ最優秀論文賞受賞論文を選定し、結果をホームページに掲載した。

今後のアクションプラン

1. DMPK 国際化委員会と協力して新編集委員と Editorial Board の人選を進め、1/3 の編集委員と Editorial Board を海外から迎える。
2. IF の取得のため、遅滞なく雑誌を発行し、ISI 社へ定期的な発行が維持されていることをアピールする。
3. 編集委員で選ぶ最優秀論文賞の選考規定に ISSX の方式を取り入れ、選考規定を整備した後、来年から施行する。
4. Letter to the Editor を新設する

5. DMPK 三賞の新設と受賞者について(千葉 寛編集委員長)

—「編集委員が選ぶ最優秀論文賞」、「ベストダウンロード論文賞」、「ベストサイテーション論文賞」—
本学会の学会誌が和文誌の「薬物動態」に代わって、英文誌「Drug Metabolism and Pharmacokinetics」(以下、DMPK と略)になってから4年半が経過いたしました。その間、掲載全論文のPubMedへの収載、J-stageへの掲載と国内外への本誌の広報活動も着実に進展し、掲載論文についての海外からの評価も非常に高いことが、国際会議の折に多くの方から伺っています。Impact factor(IF)取得申請後3年目を迎え、IF取得も間もないところまで参りました。

このような折、さらに会員の皆様の DMPK への投稿意欲を高めるため、理事会に設置された「ベストダウンロード賞」を考える委員会、編集委員会での検討、さらに理事会での議を経て、今年から DMPK に掲載された論文について「ベストダウンロード論文賞(英名:総説について DMPK Award for the Most Frequently Downloaded Review Article in 200X;原著論文について DMPK Award for the Most Frequently Downloaded Original Article in 200X)」、「ベストサイテーション論文賞(英名:DMPK Award for the Most Frequently Cited Review (Original) Article in 200X)及び「編集委員が選ぶ最優秀論文賞

(英名: DMPK Editors' Award for the Most Excellent Article in 200X)」を設けることになりました。

「ベストダウンロード論文賞」は、DMPK に掲載された総説と原著論文それぞれについて、学会の HP 及び J-stage に掲載後 12 ヶ月間に最も多くダウンロードされた論文の著者全員を顕彰する、「ベストサイテーション論文賞」は、発行年を含む 5 年間 (5 年目は顕彰の関係から 8 月まで) に最も引用件数 (ISI 社データ) が多かった論文の著者全員を顕彰する、「編集委員が選ぶ最優秀論文賞」は DMPK の編集委員会が、その年に発行された論文の中で最も優れた論文に選定した著者全員を顕彰する、という主旨の賞です。それぞれの賞の 1 位の論文の全著者には、年会期間中の学会賞各賞の授与式のときに盾あるいは賞状授与することになりました。また、「ベストダウンロード論文賞」、「ベストサイテーション論文賞」については第 1 から 3 位までの論文名と全著者名を、「編集委員が選ぶ最優秀論文賞」については、1 位の論文名と全著者名を、それぞれニュースレター及び学会のホームページで公表しその榮譽を讃えることになりました。

本年度の上記三賞の受賞論文が第 67 回理事会で承認されましたのでお知らせいたします。今年度は最初の年ですので、「ベストダウンロード論文賞」については過去に遡って 2002 年度 (17 巻)、2003 年度 (18 巻)、2004 年度 (19 巻) に、「ベストサイテーション論文賞」については 2002 年度 (17 巻) に、「編集委員が選ぶ最優秀論文賞」については 2005 年 (20 巻) に掲載された論文について調査又は審査した結果、下記の論文がそれぞれ第 1-3 位の論文 (編集委員が選ぶ最優秀論文賞については 1 位のみ) に選定されました。これらの論文のうち、第 1 位の論文の全著者を年会時に顕彰いたします。

1. 編集委員が選ぶ最優秀論文賞 (原著論文、2005 年)

Original

1. Nishimura A, Yokoi T, Tateno C, Kataoka M, Takahashi E, Horie T, Yoshizato K, Naito S. Induction of human CYP1A2 and CYP3A4 in primary culture of hepatocytes from chimeric mice with humanized liver. *Drug Metab. Pharmacokinet.* 2005; 20(2), 121-126

2. ベストダウンロード論文賞 (総説、原著論文、2002 年から 2004 年)

2002 年

Review

1. Fujita K, Kamataki T. Genetically engineered bacterial cells co-expressing human cytochrome P450 with NADPH-cytochrome P450 reductase: prediction of metabolism and toxicity of drugs in humans. *Drug Metab. Pharmacokinet.* 2002; 17(1): 1-22.
2. Mizuno N, Sugiyama Y. Drug transporters: their role and importance in the selection and development of new drugs. 2002; 17(2): 93-108.
3. Tsuji A. Transporter-mediated Drug Interactions. *Drug Metab. Pharmacokinet.* 2002; 17(4): 253-74.

Original

1. Kiyotani K, Fujieda M, Yamazaki H, Shimada T, Guengerich FP, Parkinson A, Nakagawa K, Ishizaki T, Kamataki T. Twenty one novel single nucleotide polymorphisms (SNPs) of the CYP2A6 gene in Japanese and Caucasians. *Drug Metab. Pharmacokinet.* 2002; 17(5): 482-7.
2. Horikawa M, Kato Y, Tyson CA, Sugiyama Y. The potential for an interaction between MRP2 (ABCC2) and various therapeutic agents: probenecid as a candidate inhibitor of the biliary excretion of irinotecan metabolites. *Drug Metab. Pharmacokinet.* 2002; 17(1): 23-33.
3. Kubota M, Nakamoto Y, Nakayama K, Ujijin P, Satarug S, Mushiroda T, Yokoi T, Funayama M, Kamataki T. A mutation in the flavin-containing monooxygenase 3 gene and its effects on catalytic activity for N-oxidation of trimethylamine in vitro. *Drug Metab. Pharmacokinet.* 2002; 17(3): 207-13.

2003年

Review

1. Katsura T, Inui K. Intestinal absorption of drugs mediated by drug transporters: mechanisms and regulation. *Drug Metab. Pharmacokinet.* 2003; 18(1): 1-15.
2. Suga T. Drug metabolism in peroxisomes: involvement of peroxisomal beta-oxidation system in the oxidative chain-shortening of xenobiotic acyl compounds. *Drug Metab. Pharmacokinet.* 2003; 18(3):155-62.
3. Funae Y, Kishimoto W, Cho T, Niwa T, Hiroi T. CYP2D in the brain. *Drug Metab. Pharmacokinet.* 2003; 18(6):337-49.

Original

1. Yamazaki H, Kiyotani K, Tsubuko S, Matsunaga M, Fujieda M, Saito T, Miura J, Kobayashi S, and Kamataki T: Two novel haplotypes of CYP2D6 gene in a Japanese population. *Drug Metab. Pharmacokinet.* 2003; 18(4): 269-271.
2. Kato M, Chiba K, Hisaka A, Ishigami M, Kayama M, Mizuno N, Nagata Y, Takakuwa S, Tsukamoto Y, Ueda K, Kusuhashi H, Ito K, Sugiyama Y. The intestinal first-pass metabolism of substrates of CYP3A4 and P-glycoprotein-quantitative analysis based on information from the literature. *Drug Metab. Pharmacokinet.* 2003; 18(6): 365-72.
3. Saito T, Egashira M, Kiyotani K, Fujieda M, Yamazaki H, Kiyohara C, Kunitoh H, Kamataki T. Novel nonsynonymous polymorphisms of the CYP1A1 gene in Japanese. *Drug Metab. Pharmacokinet.* 2003; 18(3): 218-21.

2004年

Review

1. Ozawa S, Soyama A, Saeki M, Fukushima-Uesaka H, Itoda M, Koyano S, Sai K, Ohno Y, Saito Y, Sawada J. Ethnic differences in genetic polymorphisms of CYP2D6, CYP2C19, CYP3A5 and MDR1/ABCB1. *Drug Metab. Pharmacokinet.* 2004; 19(2): 83-95.
2. Tsuda H, Ohshima Y, Nomoto H, Fujita K, Matsuda E, Iigo M, Takasuka N, Moore MA. Cancer prevention by natural compounds. *Drug Metab. Pharmacokinet.* 2004; 19(4): 245-63.
3. Mikkaichi T, Suzuki T, Tanemoto M, Ito S, Abe T. The organic anion transporter (OATP) family. *Drug Metab. Pharmacokinet.* 2004; 19(3): 171-9.

Original

1. Nishimura M, Naito S, Yokoi T. Tissue-specific mRNA expression profiles of human nuclear receptor subfamilies. *Drug Metab. Pharmacokinet.* 2004; 19(2): 135-49.
2. Tatami S, Yamamura N, Sarashina A, Yong CL, Igarashi T, Tanigawara Y. Pharmacokinetic comparison of an angiotensin II receptor antagonist, telmisartan, in Japanese and western hypertensive patients using population pharmacokinetic method. *Drug Metab. Pharmacokinet.* 2004; 19(1): 15-23
3. Nishikawa M, Ariyoshi N, Kotani A, Ishii I, Nakamura H, Nakasa H, Ida M, Nakamura H, Kimura N, Kimura M, Hasegawa A, Kusu F, Ohmori S, Nakazawa K, Kitada M. Effects of continuous ingestion of green tea or grape seed extracts on the pharmacokinetics of midazolam. *Drug Metab. Pharmacokinet.* 2004; 19(4), 280-289

3. ベストサイテーション論文賞(総説、原著論文、2002年)

Review

1. Mizuno N, Sugiyama Y. Drug transporters: their role and importance in the selection and development of new drugs. *Drug Metab. Pharmacokinet.* 2002; 17(2): 93-108.

③ ビジョン委員会報告(委員長 鈴木洋史)

(副委員長:玉井郁巳、委員:諏訪俊男、今井康彦、細川正清)

本委員会は薬物動態学会の活動のビジョンを提言し、また若手研究者の育成を図ることを目的として設立された。

- 1) 現在まで、国際対応委員会、DMPK 国際化委員会とも密接に連携をとりながら、特に国際化に向けての提言、また年会におけるシンポジウムの位置づけなどの提言を行ってきた。
- 2) 一方で、次の時代の研究の方向性を議論する場として、来年度にビジョンシンポジウムの開催を予定し、共立薬科大学・崔吉道先生を委員長、京都大学医学部附属病院・増田智先生を副委員長とした委員会を設立した。
- 3) また、ブログを開設し、例えば国際学会にての最新情報、関連領域学会の講演会・シンポジウムの案内や内容紹介などの情報交換の場とすることを予定している。

④若手研究者活性化委員会(委員長 鈴木 洋史)

(委員:岩野俊介、榎園淳一、小林好真、上家潤一、高田龍平、加藤美紀)

今年度若手研究者シンポジウム Co-chair: 前田和哉(東大・院)、小林カオル(千葉大・院)

21 回年会でフォーラムと平行して新企画として開催される若手研究者シンポジウムの企画進行状況について

1. テーマ決定

蛋白発現・機能のダイナミズムー基礎研究と臨床、創薬との接点ー

2. 活動内容

- 新たに開設したメーリングリストを通じて議論を行い、全員の状況把握と円滑な連絡ができるようにしている。シンポジウムの各内容、候補者、運営方法について東京で face to face のミーティングを二回(6/7、6/28)行った。
- 下記のごとく講演者決定。講演順は「蛋白質の一生に沿って」という考えで決めた。
核内レセプターの新機能と創薬の可能性
- 柳澤純 (筑波大学大学院生命環境科学研究科)
Non-coding RNA 研究における最前線
- 金井昭夫 (慶應義塾大学先端生命科学研究所)
病態発症に関わる膜蛋白質および分泌蛋白質の細胞内輸送機構
- 甲斐広文 (熊本大学大学院医学薬学研究部遺伝子機能応用学分野)
糖タンパク質の大規模解析
- 梶裕之、磯辺俊明 (首都大学東京大学院理工学研究科分子物質化学専攻)
ケミカルゲノミクスからの創薬インフォマティクス
- 奥野恭史 (京都大学大学院薬学研究科統合薬学フロンティア教育センター)
医薬品開発と肝毒性
- 福島民雄 (ファイザー株式会社安全性研究統括部)
- 広報活動も必要と考え、若手シンポの HP を開設し、英文/和文要旨、講演内容の簡単なスキーム、講演者の紹介、関連文献、などを公開することにより、若手シンポに対する感心を集めたいと考え、準備中である。

⑤財務委員会報告 (委員長 小林 智)

(副委員長:岩崎一秀、委員:成松鎮雄)

活動報告:前述。

⑥国際対応委員会報告 (委員長 玉井郁巳)

(副委員長:川合良成、委員:家入一郎、崔 吉道)

日本薬物動態学会会長及び理事会の委任を受け、学会誌である Drug Metabolism and

Pharmacokinetics (DMPK) 誌の国際化を促進することを目的として平成 18 年 3 月に発足した。本委員会は DMPK 誌の編集委員会、国際対応委員会、及び今後の学会ビジョンを策定するビジョン委員会と綿密な連携をとりながら、約 2 ヶ月に 1 度の電話会議を中心に、face-to-face 会議(7 月 1 日東京、9 月 9 日銚子)も適時実施し、理事会や関連する委員会に対して活発な提言を行っている。現在取り組んでいる活動は以下のようなものである。

1) Editorial Board の国際化

Chief 及び Associate Editor を除く Editorial Board メンバーを見直し、全体の 1/3~1/2 を海外研究者とする。外国人メンバーの推薦、メンバー策定・見直し基準等を提案。

2) 研究分野及び International Journal としての位置づけの明確化

ビジョン委員会と連携し、日本が世界をリードできる分野を見出す。具体的には、(i) Drug Metabolism and Transport, (ii) In Silico Modeling / IVIVE for PK in Human, (iii) Genomics (gene expression) & Genetics (in Metabolism/Transporter), (iv) Early Prediction of Drug Response in Man, (v) Population PKPD Modeling、を提案。委員全員がそれぞれ専門の分野について担当し、分野ごとに方向性・対応を検討。

3) Review Article の充実

国際誌としての注目度を向上させるための第一段階として、年間幾つかの号に絞って注目度を高めることを提案。そのためには、DMPK の特徴付けを目指す研究分野において魅力的な総説トピックを取り上げるだけでなく、Editorial の追加、Regular article とのリンク等、総説の掲載方法にあらゆる工夫が必要であると考え、提案している。

なお、2)、3)については第 21 回年会にて会員からの提案を得るためアンケートを実施。

4) Impact Factor の底上げ

多くの学会員が DMPK を学会誌として認識することが基本と考える。本誌への投稿を奨励するだけでなく、DMPK に掲載された論文が積極的に引用されるなど、学会員が愛着を持てる学会誌となるべく工夫・対応を検討し、関連委員会や理事会に提案。

今後の活動として、

- ・引き続き編集委員会を支援して本年末までの Editorial Board 改竄を目指す。
- ・来年初頭には DMPK 誌の Editorial として本委員会の提案を世界の読者に発信。
- ・第 21 年回でのアンケート調査結果を含め、DMPK 誌ニュースレターにて本委員会の活動を学会員に対し報告、提案する。
- ・ビジョン委員会、国際対応委員会と協働し、引き続き、多角的に DMPK 国際化を目指す。

⑦DMPK 編集委員会報告(委員長 千葉 寛)

活動報告: 前述。

⑧NL 編集委員会報告(委員長 山崎浩史)

(委員: 小澤正吾、加藤基浩、三浦慎一)

DMPK ニュースレター(NL)編集委員会は、2006 年 1 月より第 2 代編集委員となった。初代 NL 委員会の編集方針を引き継ぎながら、きめ細かく読者のニーズに応える企画をさらに推進していくことを主たる方針とした。この考え方や新委員の集合写真等は、学会ホームページ(URL: <http://www.jssx.org/jp/newsletter-top.html>)に掲載されている。NL 原稿執筆の際、参考にしていただく WS ワードの雛形ファイルや NL の別刷を希望される著者に負担いただく経費等も、規定として明示した(URL: <http://www.jssx.org/jp/newsletter-kitei.html>)。以下に本年の活動の概略を箇条書きにて述べる。

1) NL の継続的な連載項目

1. 展望
2. レクチャーノート
3. 実験方法シリーズ
4. アドメライン

5. アドメサークル(日本の薬物動態研究者)
6. 学会参加体験記
7. 英文 DMPK 著者から読者へのメッセージ
8. 理事会報告
9. 本学会年会、ワークショップや、他学会からの予告
10. 事務局便り

2) 掲載済みのニュース

1. 薬物動態試験推進委員会の活動の紹介
有限責任中間法人「医薬品開発支援機構」設立の経緯や法人の目的、「早期臨床試験による医薬品開発促進に関する意見書」、および「医薬品開発における PK/PD 試験推進の必要性」の3部作。本別刷りは、学会事務局より政府機関や各種団体へ送付した。
2. 2006年4月より稼働した DMPK 電子投稿システムの日本語での解説
3. DMPK 関連三賞「編集委員が選ぶ最優秀論文賞」、「ベストダウンロード論文賞」、「ベストサイテーション論文賞」の創設と受賞論文の紹介

3) 今後のアクションプラン

1. 薬物動態学会の各種委員会から、中間的結論、問題点や今後の活動計画等に関して、積極的な NL への掲載を働きかけ、それらを実行に移す。
2. 学会 HP 等との役割分担を考え、NL 冊子体の特徴を活かした活動を行う。現在、研究黎明期当時の記録を冊子に残すことを目指し、新企画「薬物動態事始め」を準備中である。

⑨DMPK 電子投稿 WG 報告(委員長 小澤正吾)

(委員:山崎浩史、伊藤晃成、崔 吉道)

DMPK 電子投稿小委員会は、ScholarOne 社電子投稿システム Manuscript Central(MC)を DMPK の編集体制に合わせるカスタマイズの作業を、日本代理店・杏林舎と共に行った。DMPK 誌のスコープとなるキーワードのリストの作成、電子投稿用に投稿規程の修正の作業を経て2006年4月1日より、正式稼働となった。DMPK 誌ニュースレターに投稿マニュアルおよび、視覚に訴える投稿過程の図を掲載、さらに JSSX ホームページに上記の英語版を掲載し、本誌の新しい投稿・査読編集システムの周知に努めた。

電子投稿供用後の状況

1. 投稿者から、4月1日以降、Copy right transfer form の送付の時期に関する投稿規程の記述と、編集委員からの Preliminary Decision 内の記述が不統一である旨の指摘があったため、適切に改訂した。
2. (主に査読者、編集委員より)操作上の質問が編集局に寄せられている(ある査読者のケースで4月に2件、5月、6月で各1件)。査読者に対しては、MC システム内の”Get Help Now”を活用して対応することが求められた。学術誌ごとに編集体制が異なるため、MC システム内に編集委員向けの”Tutorial”が整備されていない。10月25日現在、ScholarOne 社の日本代理店杏林舎が作成中。
3. 暫くの間は電子投稿と従来の紙媒体での投稿とが併用。今後問題がなければ電子投稿に一本化の予定。

今後のアクションプラン

1. DMPK 誌の Impact Factor (IF)の取得

Thomson ISI 社に DMPK の IF 認定に関して本年5月10日の JSSX からの問い合わせに対し、8月中旬に、ISI より「Vol 20 (nos 1, 2 and 3, 2005) の3巻を受け取ったが、審査のためには、それ以降、最新号まで継続的な送付が必要である」旨の回答を得たので直ちに対応した。認定基準が厳しくなっており、今後も各号発行時、速やかに ISI 社に送付し、これを認定が降りるまで継続し、定期的な発行が維持されていることをアピールする必要があると考えられる。審査完了(見込み)時期は確答を避けられているが、少なくとも2007年の3号を ISI 社が受領後になるとのことであった。

⑩DMPK ‘ベストダウンロード’賞を考える会(委員長 小田切優樹)

(委員:寺崎哲也、千葉 寛)

DMPKに掲載された総説と学術論文について、学会HPおよびJ-stage上に12ヶ月間に最も多くダウンロードされた論文それぞれ1件を選定して顕彰し、選定された論文の著者すべてに賞状あるいは楯を贈呈する。選考についてはDMPK編集委員会が選考委員会を設け選考し、決定結果をDMPK誌とHPに上位3件まで掲載する。

なお、本年度は過去に遡って2002年度(17巻)、2003年度(18巻)、2004年度(19巻)に掲載された論文について審査することに決定。

⑪DMPK 国際化委員会報告(委員長 川合良成)

(副委員長:千葉雅人、委員:加藤将夫、玉井郁巳、永田清、橋本征也、細川正清)

日本薬物動態学会会長及び理事会の委任を受け、学会誌である Drug Metabolism and Pharmacokinetics (DMPK) 誌の国際化を促進することを目的として平成 18 年 3 月に発足した。本委員会は DMPK 誌の編集委員会、国際対応委員会、及び今後の学会ビジョンを策定するビジョン委員会と綿密な連携をとりながら、約 2 ヶ月に 1 度の電話会議を中心に、face-to-face 会議(7 月 1 日東京、9 月 9 日銚子)も適時実施し、理事会や関連する委員会に対して活発な提言を行っている。現在取り組んでいる活動は以下のようなものである。

1) Editorial Board の国際化

Chief 及び Associate Editor を除く Editorial Board メンバーを見直し、全体の 1/3~1/2 を海外研究者とする。外国人メンバーの推薦、メンバー策定・見直し基準等を提案。

2) 研究分野及び International Journal としての位置づけの明確化

ビジョン委員会と連携し、日本が世界をリードできる分野を見出す。具体的には、(i)Drug Metabolism and Transport, (ii)In Silico Modeling / IVIVE for PK in Human, (iii) Genomics (gene expression) & Genetics (in Metabolism/Transporter), (iv) Early Prediction of Drug Response in Man, (v) Population PKPD Modeling、を提案。委員全員がそれぞれ専門の分野について担当し、分野ごとに方向性・対応を検討。

3) Review Article の充実

国際誌としての注目度を向上させるための第一段階として、年間幾つかの号に絞って注目度を高めることを提案。そのためには、DMPK の特徴付けを目指す研究分野において魅力的な総説トピックを取り上げるだけでなく、Editorial の追加、Regular article とのリンク等、総説の掲載方法にあらゆる工夫が必要であると考え、提案している。

なお、2)、3)については第 21 回年会にて会員からの提案を得るためアンケートを実施。

4) Impact Factor の底上げ

多くの学会員が DMPK を学会誌として認識することが基本と考える。本誌への投稿を奨励するだけでなく、DMPK に掲載された論文が積極的に引用されるなど、学会員が愛着を持てる学会誌となるべく工夫・対応を検討し、関連委員会や理事会に提案。

今後の活動として、

- ・引き続き編集委員会を支援して本年末までの Editorial Board 改竄を目指す。
- ・来年初頭には DMPK 誌の Editorial として本委員会の提案を世界の読者に発信。
- ・第 21 年回でのアンケート調査結果を含め、DMPK 誌ニュースレターにて本委員会の活動を学会員に対し報告、提案する。
- ・ビジョン委員会、国際対応委員会と協働し、引き続き、多角的に DMPK 国際化を目指す。

⑫広報委員会報告(委員長 乾 賢一)

(委員:齋藤秀之、成松鎮雄、須藤賢一)

広報委員会は、本学会活動の国内外に対する情報発信・共有を目的とし、次のような検討を進めている。

- 1) 登録会員向けのメールによる情報発信システムを活用する。
- 2) 薬物動態学会の社会的役割・貢献について、会長等による HP 上でのメッセージ提示を予定している。

また大学、製薬企業、病院等の現会員から原稿を募り、創薬、医薬品適正使用、治験、薬学教育などのテーマを中心とした「一般向け情報」のHP掲載を計画している。

3)2008 年度年会(熊本)における市民公開セミナーの企画立案を進める。

⑬HP 改革委員会報告(委員長 成松鎮雄)

(委員:内藤真策、石井祐次、大河原賢一、設楽悦久)

学会の広報活動の重要な手段としての Home Page の役割と機能をさらに向上させるため、広報委員会の下部組織であるHP改革委員会では、「Home Page の全面改革」を目標に種々協議を行い、「HP改革委員会からの提言(その1)」を理事会に提出した。

その提言を踏まえて、事務方では追加予算を必要としない範囲で Top Page の手直しをして、この半年で次ページのように変貌している。今後は Top Page のデザイン変更、機能ボタンの配置や「ニュースレター」、「会員のページ」等の内容(コンテンツ)の整理と見直しを進めると共に、広報委員会と共同して「一般の方々に対するアピールの方策」等を検討し、来年の3月頃を目処に改革案をまとめ、次年度に全面改訂の予定である。

なお、Top Page のスペースに薬物動態学会の HP に相応しい絵・写真を配置するに当たって、その図案を会員から公募することとなった。応募要領の詳細はHPに記載する。Top Page のデザインも今後変更する予定であるが、一例として下記のスペースが挙げられる。



1) 2006年6月1日時点(「お知らせ」が入りきらず、スクロールする必要あり)

2) 2006年10月28日時点(「お知らせ」がこの画面に納まっている)

⑭教育委員会(委員長 横井 毅)

⑮教育委員会・ショートコース委員会報告(委員長 岩崎一秀)

(副委員長:横井 毅、委員:池田敏彦、山下伸二)

本委員会は教育委員会の下部委員会として以下の使命および役割を担う。

使命

- ・医薬品の効率的な開発に必要なテクノロジーの普及を図る。すなわち、薬物動態領域およびその関連領域において、医薬品の開発に有用なテクノロジーを普及する。

役割

・ニーズの把握

医薬品の効率的な開発において、導入したいテクノロジーの有無を調査して、必要ならば普及を図る。

・テクノロジーの普及

導入の必要なテクノロジーをショートコース等適切な手段により普及する。

⑯教育委員会・ベストポスター賞選考方法の検討委員会報告(委員長 池田敏彦)

(委員:北田光一、杉山雄一、辻 彰、横井 毅、大塚峯三)

1. 委員会の使命・役割

(ア) 21 年会から採用を目処としてルール化する

2. 委員会の活動状況

以下に記載のごとく、ISSX 方式の選考方法に第 21 回年会から切り替えることとした。

ただし、post-doctoral と undergraduate は現時点では区別しない。

1) 本年会のベストポスター賞応募者(本年会ではWEBからの演題申し込みの際、BP 賞応募用のボタンを設置して確認):87 演題

2) 講演要旨は下記 36 名の委員に 20 演題ずつわりつけて評価。1 演題/6 名

大槻純男、楠原洋之、崔吉道、成富洋一、藤田卓也、山下富義、家入一郎、Chang-Koo Shim、矢野育子、山本康次郎、岩崎一秀、永田 清、細川正清、松永民秀、山崎浩史、Jin-Ding Huang、久米俊行、高桑 奨、富田幹雄、馬場隆彦、松本一郎、松本 聡、間野祐司、三浦慎一、

森脇俊哉、渡邊健悟(順不同、敬称略)

3) 配点は下記の項目について五段階評価し、1 点から 5 点を配する(3:普通、を中心として、良い: 4、非常に良い: 5、あまり良くない: 2、良くない: 1)。各項目の得点を合わせ、総得点を合計する(最高で 20 点)。

①研究テーマのインパクト、扱っている問題の軽重、②実験手法の良否、③得た結果の正当性、

④発表内容の論理性、明確さ

4)ひとつの講演要旨につき 6 人の選考委員の点数の平均点を計算し、その点数に基づき、委員長は全体の応募数の 5~10%程度を Finalist として選出する(本年度は 10 演題選出)。Finalist の人数は委員長の裁量とするが 10 人を上回らないこととする。

5) Finalist のポスターは年会を通じて掲示する(1 日目と 2 日目。今年度は 5F 総合受付近く)。各選考委員は年会初日に閲覧し、必要に応じて質問をして同じ採点表を用いてすべての Finalist のポスターを採点する。年会 2 日目の昼食時に BP 賞選考委員会を開催して最終集計をし、その結果に基づいて 3 題を BP 賞に選定する。

年会 2 日目夕方の懇親会に Finalist 全員を招待し、名前を参加者に紹介後 ベストポスター賞を順に発表し、表彰する。

⑰薬物動態試験推進委員会報告(委員長 池田敏彦)

(副委員長:千葉 寛、委員:小林 智)

1. 委員会の使命・役割

1) 有限責任中間法人医薬品開発支援機構、他学会、規制当局などへの対応、わが国における薬物動態試験の推進 ここ当面は、有限責任中間法人医薬品開発支援機構(Association for Promoting

Drug Development: APDD)の活動を支援すること、および早期探索臨床試験実施にむけての活動が薬物動態試験推進委員会の主たる使命。

2. 委員会の活動状況

APDD 活動の支援

○第一回総会を6月22日に実施した。

1) 放射線内部被曝評価委員会および中央倫理審査委員会委員の承認(下記、敬称略)。

- 放射線内部被曝評価委員会** 委員長: 日本アイソトープ協会甲賀研究所 所長 栗原紀夫
同 委員: 日本アイソトープ協会医療情報室 室長 池淵秀治、放射線総合医学研究所 理事 高橋千太郎(土居雅広氏死去により、新任)、東京大学医学部付属病院薬剤部 講師 樋坂章博、同 Ad hoc 委員: 先端医療振興財団映像医療研究部 部長 千田道雄
- 中央倫理審査委員会** 委員長: (財)日本公定書協会 専務理事 土井 脩
同 委員: 聖マリアンナ医科大学 教授 小林眞一、横浜国立大学大学院国際社会科学研究所 助教授 辰井聡子、日本経済新聞社科学技術部 編集委員 中村雅美、国立がんセンター中央病院 治験管理室長 藤原康弘

2) 新たな理事・監事が承認され、下記の構成となった(敬称略)。

代表理事: 高仲正、副代表理事: 宮崎浩、
理事: 池田敏彦、乾 賢一、大橋京一、杉山雄一、鈴木洋史、辻 彰、藤原博明、渡邊裕司
監事: 大塚峯三、立石 満
社員: 田中 實、野口 英世

○放射線内部被曝評価委員会 第1回ブリーフィング会議を実施(全員出席) 8月30日
(委員長 栗原 紀夫、委員: 池淵 秀治、高橋 千太郎、樋坂 章博、千田 道雄)

○中央倫理審査委員会第1回ブリーフィング会議を実施(全員出席) 9月14日
(委員長 土井 脩、委員: 小林 眞一、辰井 聡子、中村 雅美、藤原 康弘)

○APDD キックオフシンポジウム(Organizer: 杉山雄一先生):

2007年2月16日(金)17日(土) 昭和大学上條講堂において開催予定。
講演者は厚生労働省 黒川審議官、製薬協 青木会長、医薬品総合機構 森部長をはじめ、
関連分野のエキスペート23名を最終化。ポスター完成し各施設配布済み。

○APDD ホームページ立上げ準備中 各種委員の意見を集計、修正作業中。

⑩フォーラム委員会報告(オーガナイザー 山下伸二)

(副委員長: 小田切優樹、委員: 池田敏彦、横井 毅、大野泰雄)

今年の年会のフォーラムのメインテーマを

「薬物動態研究と毒性研究の連携はいかになされるべきか ～ヒト代謝物試験を中心として～」、
12月1日(金)A会場(14:30～18:15)で開催。

F-1 医薬品開発における毒性・安全性試験の現状と問題点
堀井郁夫(ファイザー株式会社中央研究所)

F-2 代謝物毒性試験に関するFDAドラフトガイダンスについて: 製薬協としての提言
内藤真策(株)大塚製薬工場栄養研究所、製薬協医薬品評価委員会基礎研究部会)

F-3 代謝物の毒性試験に対する日本の規制当局の考え
笛木修(医薬品医療機器総合機構新薬審査第一部)

F-4 前臨床研究の立場からー薬物動態の人種差と薬効・毒性
山崎浩史(昭和薬大)

F-5 臨床医の立場から 分子イメージング技術を用いた薬物動態研究への期待-動物と人のデータ比較-
井上登美夫(横浜市立大学附属病院放射線科)

F-6 代謝物毒性試験における薬物動態研究の役割-日本人を対象とする RI 試験の重要性-
池田敏彦(三共・薬剤動態研究所)

- ・ 総合討論

8. その他

8-1) 薬物動態誌の電子アーカイブ化について(事務局長)

- ・JST(科学技術振興機構)では、平成 17 年度から国内学協会の学術雑誌の国際発信力強化と知的財産の保存を目的として、重要な学術雑誌を過去に遡って電子化する電子アーカイブ事業を開始。
- ・平成 18 年度は、申請された 612 誌から新たに 65 誌を電子アーカイブ対象誌として追加選定。
- ・「薬物動態」誌が、65 誌(英文 18, 和文誌 22, 和欧混載誌 25)の一つに選定。
- ・JST は電子化を完了したのから J-stage に順次登載・公開。これにより、来春頃までには、薬物動態誌(第 1 巻から第 16 巻)に掲載された全原著論文が J-stage 上で読むことが可能。

8-2) 創薬動態(レクチャーノートの単行本)の発行について(玉井郁巳編纂委員長)

DMPK 誌に連載したレクチャーノートを、最新の情報を含むように改訂するとともに、不足分野を補う書き下ろしも追加し、最終的に探索・前臨床・臨床試験を含む創薬に関わる現在の薬物動態研究分野広くカバーした単行本として 11 月末に発行。

II. 審議事項

1. 平成17年度収支決算について(小林 智財務委員長、吉村義信監事)

平成17年度 収支計算書(一般会計)

(平成17年1月1日から平成17年12月31日まで)

勘定科目	平成16年度 決算額	平成17年度 予算額(A)	平成17年度 決算額(B)	差異 (A)-(B)	備考
(収入の部)					
会費収入	20,901,400	21,470,000	23,991,000	-2,521,000	
正会員会費	12,589,400	12,400,000	15,100,000	-2,700,000	正会員 1,887.5名
学生会員会費	1,032,000	1,800,000	1,696,000	104,000	学生 424名
賛助会員会費	6,800,000	6,800,000	6,700,000	100,000	74社 134口
購読会員会費	480,000	470,000	495,000	-25,000	31機関(内、2機関2年分入金)
事業収入	10,213,991	8,750,000	10,482,177	-1,732,177	
論文投稿料	2,814,000	2,200,000	2,506,000	-306,000	DMPK Vo.20No.1～No.6
別刷料	663,450	700,000	522,300	177,700	DMPK Vo.20No.1～No.6
バックナンバー売上	161,340	150,000	417,064	-267,064	海外販売29件等
広告掲載料	6,401,400	5,400,000	5,585,200	-185,200	DMPK Vo.20No.1～No.6
雑収入	173,801	300,000	1,451,613	-1,151,613	和解金、学術著作権機構、英文許諾抄録料、 過年度誤計上分修正等
その他補助金等収入	0	0	3,900,013	-3,900,013	科学研究費補助金
利息	1,701	1,000	82	918	
小計	31,117,092	30,221,000	38,373,272	-8,152,272	
前期繰越金	4,564,620	4,564,620	2,769,324	1,795,296	
合計	35,681,712	34,785,620	41,142,596	-6,356,976	
(支出の部)					
事務局経費	1,892,592	2,230,000	765,866	1,464,134	
通信費	1,621,181	2,000,000	632,290	1,367,710	郵便、宅急便等(DMPK発送費は出版経費に計上)
振込手数料	33,565	30,000	28,900	1,100	
事務消耗品費	237,846	200,000	104,676	95,324	事務用品など
印刷費	566,230	800,000	553,693	246,307	年会資料等事務局で作成のため削減
人件費	2,227,400	2,180,000	3,525,520	-1,345,520	
編集局人件費	1,027,400	980,000	1,025,520	-45,520	編集アルバイト人件費
事務局人件費	1,200,000	1,200,000	2,500,000	-1,300,000	事務局長人件費
事務委託費	4,567,730	4,600,000	4,225,515	374,485	IMICへの業務委託費
編集経費	3,307,210	4,000,000	3,621,658	378,342	DMPK Vo.20No.1～No.6
出版経費	12,924,177	11,000,000	14,720,104	-3,720,104	DMPK Vo.20No.1～No.6(発送費¥1,872,806を含む)
会議費	2,806,425	2,700,000	1,978,898	721,102	理事会・各種委員会
学会賞等経費	1,204,235	1,200,000	1,333,183	-133,183	学会賞, 功労賞, 奨励賞
年会開催補助金	500,000	500,000	500,000	0	第20年会用
ワークショップ開催補助金	300,000	300,000	300,000	0	第19回ワークショップ
名簿作成費	0	0	0	0	
名簿関係送料	0	0	0	0	
雑費	1,447,560	50,000	466,285	-416,285	PC代、外為手数料等
雑支出	0	0	369,800	-369,800	過年度年会広告費返金等
基金繰入支出	0	0	5,000,000	-5,000,000	
予備費	0	400,000	0	400,000	
貸倒金	1,168,829	0	0	0	
小計	32,912,388	29,960,000	37,360,522	-7,400,522	
当期収支差額	-1,795,296	261,000	1,012,750	-751,750	
次期繰越金	2,769,324	4,825,620	3,782,074	1,043,546	
合計	35,681,712	34,785,620	41,142,596	-6,356,976	

平成 18年 5月 12日

上記監査の結果、正確であることを認めます。

監事	大野 泰雄	印
監事	吉村 義信	印

(印鑑省略)

貸借対照表

(平成17年12月31日現在)

借方		貸方	
科目	金額	科目	金額
現金	30,038	未払費用	4,335,513
小口現金	85,990	前受会費	8,000,000
普通預金(三井住友/麹町)	3,343,464	前受金	56,871
普通預金(東京三菱/春日町)	2,650,504	基金への繰入金	5,000,000
普通預金(みずほ/本郷)	4,051,143		
郵便振替	7,696,551	次期繰越金	3,782,074
未収入金	3,314,268	(前期繰越金)	2,769,324
前払費用	2,500	(当期収支差額)	1,012,750
合計	21,174,458	合計	21,174,458

財産目録

(平成17年12月31日現在)

資産の部		
現金	事務局小口現金	30,038
小口現金	編集局小口現金	85,990
普通預金	東京三菱銀行 春日町支店	2,650,504
普通預金	みずほ銀行 本郷支店	4,051,143
普通預金	三井住友銀行 麹町支店	3,343,464
郵便振替	東京貯金事務センター	7,696,551
未収入金		3,314,268
	投稿料 Vol.20 No.5~6	570,000
	別刷り料 Vol.20 No.5~6	86,000
	広告掲載料 Vol.20 No.5~6	1,950,400
	雑収入 科学技術振興機構許諾料(12月分)	4,200
	その他補助金 科研費Vol.20 No.6用資金	688,668
	購読会費 Vol.20分	15,000
前払費用	DMPK Vol.21海外購読料外為手数料	2,500
資産合計		21,174,458
負債の部		
未払費用		4,335,513
	編集事務局人件費12月分	70,060
	編集経費Vol.20 No.6	655,200
	編集経費 通信費(12月分)	3,890
	出版経費Vol.20 No.6	2,705,684
	出版経費HP保守等	111,000
	印刷費	39,768
	年会仮受精算	552,968
	会議費	640
	事務局経費	196,303
	通信費	194,787
	消耗品費	1,516
前受会費	平成18年度会費	8,000,000
前受金	平成18年バックナンバー売上	56,871
基金への繰入金	基金会計へ繰入	5,000,000
負債合計		17,392,384

平成 17 年度 収支計算書（基金会計）
（平成 17 年 1 月 1 日から平成 17 年 12 月 31 日まで）

勘 定 科 目	平成17年度 予算額(A)	平成17年度 決算額(B)	差 異 (A)-(B)	備 考
(収入の部)				
繰入金	0	5,000,000	-5,000,000	一般会計より繰入計上
当 期 収 入 合 計	0	5,000,000	-5,000,000	
前 期 繰 越 金	0	0	0	
(支出の部)				
該当なし	0	0	0	
当 期 支 出 合 計	0	0	0	
次 期 繰 越 金	0	5,000,000	-5,000,000	

平成 18 年 5 月 12 日

上記監査の結果、正確であることを認めます。

監 事 大 野 泰 雄

印

監 事 吉 村 義 信

印

（印鑑省略）

貸 借 対 照 表（基金会計）

（平成17年12月31日現在）

借 方		貸 方	
科 目	金額	科 目	金額
定期預金(東京三菱/本郷)	4,000,000	基金	12,000,000
郵便定額預金	8,000,000	次期繰越金	5,000,000
繰入金	5,000,000		
合 計	17,000,000	合 計	17,000,000

財 産 目 録（基金会計）

（平成17年12月31日現在）

資産の部		
定期預金	東京三菱銀行 春日町支店	4,000,000
郵便振替	定額郵便貯金	8,000,000
繰入金	一般会計より繰入	5,000,000
資産合計		17,000,000
負債の部		
該当なし		
負債合計		0

2) 旧学会事務センターの破産に伴う損金の修正について(吉村義信監事)

昨年の評議員会・総会において、平成 16 年度収支決算報告で、旧学会事務センターの破産に伴う損金として新たに¥579,800(学会事務センターの預かり金から、第 56 回理事会交通費と会議費の合計 ¥579,800 が支出されていたが、実際、学会事務センターからは、本費用の支払いがなく、この額を損失)が発見され、それを破産更正債権として処理した旨、報告した。しかし、平成 17 年度決算報告書作成時に、IMIC の経理担当者から「平成 16 年度損失が判明した時点で学会事務センター預かり金の清算は終了しており、¥579,800 の損金は発生していない。二重のマイナスの計上である」との指摘を受けた。

経理担当者と詳細に検討した結果、損金は発生していないとの結論になりました。この結果を踏まえ、平成 17 年度収支決算書では、本金額を「雑収入」とし、平成 16 年度の収支決算書の貸借対照表から破産更正債権を削除した。

2. 平成19年度収支予算案について(小林 智財務委員長)

平成19年度 収支予算案(一般会計)
(平成19年1月1日から平成19年12月31日まで)

勘定科目	平成17年度 決算額	平成18年度 予算額	平成19年度 予算額	備 考
(収入の部)				
会費収入	23,991,000	21,005,000	21,715,000	
正会員会費	15,100,000	12,800,000	13,000,000	平成18年度予算に準拠
学生会員会費	1,696,000	1,500,000	1,500,000	平成18年度予算に準拠
賛助会員会費	6,700,000	6,250,000	6,750,000	新規1社増口 73社(135口)
購読会員会費	495,000	455,000	465,000	31社
事業収入	10,482,177	9,500,000	10,450,000	
論文投稿料	2,506,000	2,500,000	2,500,000	
別刷料	522,300	650,000	450,000	別刷料減傾向
バックナンバー売上	417,064	150,000	300,000	ISSX経由購入数増加(\$55×30-手数料; ¥150,000)のため増
広告掲載料	5,585,200	6,000,000	7,000,000	パナ-広告分(¥85,000×12; 約¥1,000,000)増
雑収入	1,451,613	200,000	200,000	学術著作権機構、英文許諾抄録料等
その他補助金収入	3,900,013			
利息	82	1,000	1,000	
小 計	38,373,272	30,506,000	32,166,000	
前期繰越金	2,769,324	2,769,324	4,564,620	
合 計	41,142,596	33,275,324	36,730,620	
(支出の部)				
事務局経費	765,866	1,835,000	900,000	
通信費	632,290	1,600,000	650,000	雑誌発送費用含まず
振込手数料	28,900	35,000	50,000	会費自動引落とし開始により手数料増
事務消耗品費	104,676	200,000	200,000	
印刷費	553,693	500,000	600,000	平成17年度実績を反映
人件費	3,525,520	3,400,000	3,400,000	
編集局人件費	1,025,520	1,000,000	1,000,000	
事務局人件費	2,500,000	2,400,000	2,400,000	
事務委託費	4,225,515	4,500,000	4,800,000	契約額 ¥4,204,515+¥504,011(増額)
編集経費	3,621,658	3,300,000	3,800,000	電子投稿システム保守分(¥400,000)増
出版経費	14,720,104	11,800,000	11,300,000	雑誌発送費含む
ホームページ関係費			1,000,000	平成18年度決算より科目追加 HP改革費用(¥500,000含)
会議費	1,978,898	2,500,000	3,000,000	委員会増への対応
学会賞等経費	1,333,183	1,200,000	1,400,000	DMPK関連3賞追加への対応
年会開催補助金	500,000	500,000	500,000	
ワークショップ開催補助金	300,000	300,000	300,000	
公認会計士監査費用			315,000	平成19年度より外部監査実施のため
慶弔費			100,000	平成19年度決算より科目追加
雑費	466,285	50,000	100,000	
雑支出	369,800			
基金繰入支出	5,000,000			
予備費	0	400,000	400,000	
小 計	37,360,522	30,285,000	31,915,000	
今期収支差額	1,012,750	221,000	251,000	
次期繰越金	3,782,074	2,990,324	4,815,620	
合 計	41,142,596	33,275,324	36,730,620	

3. 新評議員、名誉会員、会則の改定について(寺崎哲也委員長)

① 新評議員について (評議員会承認事項)

評議員選出および資格に関する規定(細則 3)に従い、推薦のあった候補者について総務委員会で推薦資料に基づいて予備審査した。予備審査の結果、下記 12 名を理事会に推挙し、第 67 回理事会において承認された。

なお、「評議員の選出」は規定によって評議員会での承認事項であり、ご審議願います。

	氏名	所属・部署名	所属先役職	会員歴	推薦者
1	麻生 良典	中外製薬株式会社 研究本部前臨床研究部	部長	20 年	大塚 峯三
2	家入 一郎	九州大学大学院 薬学研究院	助教授	11 年	樋口 駿
3	大槻 純男	東北大学大学院 薬学研究科	助教授	5 年	寺崎 哲也
4	桂 敏也	京都大学医学部附属病院 薬剤部	助教授 副薬剤部長	9 年	乾 賢一
5	木村 敏行	北陸大学 薬学部	助教授	5 年	山本 郁男
6	出口 芳春	帝京大学 薬学部	教授	13 年	玉井 郁巳
7	埴岡 伸光	岡山大学大学院 医歯薬学総合研究科	助教授	11 年	成松 鎮雄
8	馬場 隆彦	塩野義製薬株式会社 新薬研究所	部門長	20 年	成松 鎮雄
9	布施 英一	協和発酵工業株式会社 医薬研究センター薬物動態研究所	所長	12 年	杉山 雄一
10	三浦 慎一	三共株式会社 薬剤動態研究所	主席研究員	6 年	池田 敏彦
11	宮田 康行	小野薬品工業株式会社 薬物動態研究所	所長	2 年	杉山 雄一
12	湯川 栄二	第一薬科大学 臨床薬剤学	教授	15 年	樋口 駿

名誉会員の推挙について (評議員会承認事項)

池田敏彦理事から黒岩幸雄氏(昭和大学名誉教授、元昭和大学薬学部長、75 歳)、乾 賢一理事から渡邊 淳氏(愛知学院大学薬学部・薬学部長、名古屋市立大学名誉教授、70 歳)の推薦があった。総務委員会で予備審査し、両氏とも名誉会員に相応しいとして、11 月 7 日開催の持ち回り理事会に推挙し、両氏を名誉会員として評議員会へ推挙することを決定した。

なお、「名誉会員」は規定によって評議員会の承認事項であり、ご審議願います。

薬物動態学会会員の休会制度ならびに海外在住届制度の導入について(一部、評議員会及び総会の承認事項)

総務委員会からの提案に基づき理事会で審議し、2007 年 1 月 1 日から「会員の休会制度」を新設することとした。これに伴い「細則」の改定が理事会で決定された。一方、本件の場合、さらに「会則」の改定が必要であり、既に、理事会では承認済みであるが、「会則の改定」は評

議員会と総会の承認事項である。よって、下記の「会則の改定」をご審議願います。

「会則の改定」

【第三章 会員】

第11条 正会員及び学生会員は、別途定める事由に該当したとき、届出に基づいて会長は休会を認めることができる。

(なお、第11条(旧)は第12条(新)へ順次変更する。)

参考： 「細則の改定」(理事会承認事項として確定)

【正会員及び学生会員の休会及び海外在住届に関する細則】

第1条 「海外留学」「海外勤務等」「長期病気療養」「出産・育児休暇」の場合、2年間に限り休会を認める。別途定める「休会届」を提出し、総務委員会で審議し、承認する。

第2条 休会期間中の会費の納入を免除する。再入会をする時、休会期間中の会費の納入は必要としない。

第3条 休会期間中は「非会員」扱いとする。機関誌の配布はしない。年会、ワークショップへの参加は「非会員」扱いとする。評議員、学会賞各賞の応募の際、休会期間は会員期間と認めない。

第4条 「海外留学」「海外勤務等」で海外に在住する会員が、別途定める「海外在住届」を提出し「会費」を納入する場合、その間の会員資格は継続する。「海外在住届」は、事務局が取り扱い、総務委員会へ報告する。

第5条 その他、特別な措置を要するときは、別途、総務委員会で協議する。

4. 第23回、第24回年会長および第23回ワークショップ代表世話人について(杉山雄一会長)

○第23回(平成20年)年会長：小田切優樹(熊本大学大学院)

○第24回(平成21年)年会長：乾 賢一(京都大学医学部附属病院)

○第23回(平成21年)ワークショップ代表世話人：馬場隆彦(塩野義製薬(株))

Ⅲ. 第 21 回ワークショップおよび第 1 回ショートコースについて(岩崎一秀代表世話人)

1. 第 21 回ワークショップについて

日時:2007 年 4 月 12 日(木)、13 日(金)

場所:昭和大学・上條講堂(東京都品川区旗の台 1-5-8)

主題:医薬品開発を加速化・効率化するためのボトルネック解消

< 演題名は仮題 >

第一日目(4月12日、8:55 - 17:15)

8:55-9:00 代表世話人 挨拶

岩崎一秀(ファイザー)

基調講演

9:00-10:00 システムバイオロジーと創薬

秋山泰(産総研・東京工業大)

テーマ1:臨床開発の効率化(臨床開発におけるボトルネックとその解消)

10:15-11:00 個別化医療における薬物動態研究の役割

山崎浩史(昭和薬大)

11:00-11:45 トランスポーター遺伝子変異と薬物動態

杉山雄一(東京大学)

13:15-14:00 Biomarker 臨床における探索と応用

John L. Allison (Veeda
Clinical Research)

テーマ2:創薬段階における加速化(創薬段階におけるボトルネックとその解消)

14:00-14:45 動物における分子イメージング最先端

塚田秀夫(浜松ホトニクス)

15:00-15:45 非臨床試験におけるバイオマーカーの探索-臨床試験へのブリッジング-

戸塚善三郎(JCLバイオアッセイ)

15:45-16:30 *In silico* ADMET

Han van de Waterbeemd
(AstraZeneca)

16:30-17:15 *In silico* 関係で創薬に関わる最近の話題

梅山秀明(北里大)

17:30-19:30 懇親会

第二日目(4月13日、9:00 - 17:35)

基調講演

9:00-10:00 Novel First-in-Human Studies: Pros and Cons

Richard Lalonde (Pfizer
USA)

テーマ1:臨床開発の効率化(臨床開発におけるボトルネックとその解消)

10:15-11:00 臨床における遺伝子変異と副作用発現

横井毅(金沢大)

11:00-11:45 ゲノム薬理学にもとづく医薬品適正使用-「その意義は?」-

東純一(大阪大学)

13:15-14:00 ファーマコゲノミクスと医薬品の承認審査

宇山佳明(医薬品機構)

基調講演

14:00-15:00 医薬品開発における分析バリデーション Vinod P. Shah (元 FDA)

テーマ2: 創薬段階における加速化(創薬段階におけるボトルネックとその解消)

15:15-16:00 Chemically reactive metabolites Barry Jones (Pfizer UK)

16:00-16:45 探索段階における物性研究の役割・重要性 湯田真道(アステラス製薬)

16:45-17:30 トランスポーターを介する薬物相互作用評価法 設楽悦久(千葉大学)

17:30-17:35 代表世話人 挨拶

岩崎一秀(ファイザー)

2. 日本薬物動態学会第1回ショートコース

日時:2007年4月11日(水)

場所:昭和大学・薬学部講義室(東京都品川区旗の台1-5-8)

主題:代謝物の分離・同定・予測

< 演題名は仮題 >

13:00-13:05 委員長挨拶

13:05-14:05 ソフトイオン化法と構造解析

高山光男(横浜市立大学)

14:20-14:35 休憩

14:35-15:35 LC/MSの駆使した代謝物の構造解析手法

戸塚 善三郎(JCLバイオアッセイ)

15:35-15:50 休憩

15:50-16:05 LC/MS・LC/NMR等を用いた代謝物の構造解析手法

中山 登(中外製薬)

16:05-16:20 休憩

16:20-17:20 In cerebro/in silico 構造推定

池田 敏彦(三共)

IV. 第22回年会と8th International ISSX Meeting 仙台について

(山添 康年会長並びに Chairman)

日本薬物動態学会 第22回年会の予定

日時:2007年10月8日(月)(体育の日)

場所:仙台国際センター

内容:

- ・評議員会・総会
- ・授賞式
- ・受賞講演(学会賞、北川賞、奨励賞等)
- ・ISSX Meetingの見所、聞き所
- ・懇親会(仙台国際センター・桜の間)

Short Course 1 (Tuesday, Oct. 9)

P450-dependent Metabolism in Extrahepatic Tissues:
Implications for Drug Disposition and Toxicology

Co-Chair: K. Iwasaki/ L. Kaminsky

予定講演内容

P450-dependent Metabolism of Endogenous and Exogenous
Compounds in the Brain:

R. Tyndale (Univ of Toronto, Canada)

Role of P450 in Presystemic Disposition of Drugs in the Intestine:

K. Thummel (Univ of Washington, USA)

P450-dependent Metabolism of Drugs in the Kidney:

J. Capdevila (Vanderbilt Univ, USA)

P450-dependent Disposition of Drugs from the Skin:

H. Swanson (Univ of Kentucky, USA)

Short Course 2 (Tuesday, Oct. 9)
Novel Technologies for Transport Study in Drug Discovery and Development

Co-Chair: T. Terasaki/ D. E. Smith

予定講演内容

International Standard of Transporter Expression System:

T. Ishikawa (Tokyo Institute of Technology)

LC-MS/MS Analysis of Transporter Function and Expression:

T. Terasaki (Tohoku Univ)

ABC Transporters and Membrane Vesicles:

H. Glavinas (SOLVO)

KO Animals for Transport Analysis:

D. E. Smith (Univ of Michigan)

Short Course 3 (Tuesday, Oct. 9)
Drug Toxicity and Safety Predicted by Toxicogenomics

Co-Chair: S. Ozawa/ F.P. Guengerich

Title is to be announced: J. Kanno (NIHS, Japan)

New Approach for Toxicologically Responsible Biomarkers:

I. Horii (Pfizer, Japan)

Title is to be announced: D. Evans (Johnson & Johnson, USA)

Title is to be announced: T. Kensler (Johns Hopkins Univ, USA)

Short Course 4 (Tuesday, Oct. 9)
Prediction of Pharmacokinetics and Drug-Drug Interactions in Humans: Quantitative *In Vitro-In Vivo* Extrapolation

Co-Chair: I. Tamai/ G. Tucker

In Vitro-In Vivo Extrapolation (IVIVE) of Clearance and Drug Interactions: From Known Knowns to Known Unknowns:

G. Tucker (Univ of Sheffield, UK)

IVIVE: An Industrial Viewpoint:

R. Riley (AstraZeneca, UK)

IVIVE Versus Allometric Scaling:

T. Lave (Roche, Switzerland)

Prediction of Oral Drug Absorption in Human-From Cultured Cell Lines and from Experimental Animals:

S. Yamashita (Setsunan Univ, Japan)

Short Course 5 (Tuesday, Oct. 9)
Metabolism-Based Neurotoxicity by Xenobiotics: Mechanisms & Biomarkers

Co-Chair: S. Ohta/ R. C. Gupta

Modulation of CYP1A1 and 1B1 Metabolizing Enzymes by Xenobiotics:

Y. Y. Sheen (Ewha Womans Univ, Korea)

Egagyn-B-Glucuronidase Complex Dissociation as the Novel Biomarker of Organophosphate Exposure:

T. Satoh (Eisai, Japan)

Metabonomic Mechanisms and Biomarkers of Neuronal Damage:

R. C. Gupta (Murray State Univ, USA)

Disposition Process of Parkinsonism-Causing Neurotoxins:

S. Ohta (Hiroshima Univ, Japan)

Short Course 6 (Tuesday, Oct. 9)
Application of Genomic Data on Clinical Events

Co-Chair: K. Inui/ A. E. Rettie

Pharmacogenomics of Oral Anticoagulants:

A. E. Rettie (Univ of Washington, USA)

Title is to be announced:

H. L. McLeod (Univ of Washington)

Drug Transporter Pharmacogenomics and Personalized Medicine:

R. B. Kim (Vanderbilt Univ, USA)

Personalized Tacrolimus Therapy in Patients after Liver Transplantation:

K. Inui (Kyoto Univ Hospital, Japan)

Symposium 1 (Wednesday, Oct. 10)
P450 Monooxygenases as Drug Targets

Co-Chair: K. Chiba/ R. Prough

Aromatase Mechanism of Action in Cancer and Metabolic Disease:

E. Simpson (Prince Henry's Inst of Med Res, Australia)

Pharmacological Manipulation of P450s: Regulation of Smoking Addiction:

R. Tyndale (Univ of Toronto, Canada)

Azole Resistance in Microorganisms:

Y. Yoshida (Mukogawa Women's Univ, Japan)

P450 System in *Micobacterium Tuberculosis*: Structure, Function and Drug Targeting:

A. Munro (Univ of Leicester, UK)

Symposium 2 (Wednesday, Oct. 10)
**Rational use of In Silico Technology in Drug
Discovery and Development**

Co-Chair: S. Yamashita/ A. Wilson

The Strategic Role of Predictive ADME and Toxicity Modeling in Drug
Discovery and Development:

A. G. E. Wilson (Lexicon Genetics, USA)

Knowledge Acquisition and Data Mining in the CYP-Chemical
Interaction Studies:

F. Yamashita (Kyoto Univ, Japan)

Prediction of Drug ADME Based on PBPK Modeling:
W. Woltoz (Simulations Plus, USA)

Applying Predictive Data Mining Strategies to Toxicity Assessment:
C. Yang (Lead Scope, USA)

Symposium 3 (Wednesday, Oct. 10)
**In Vitro Toxicity Testing - How Effective is This in
Predicting In Vivo Toxicity?**

Co-Chair: A. Mutlib/ U. A. Boelsterli

予定講演内容

Shifting Attrition in Drug Discovery Using Gene Expression Analysis:
J. Waring (Abbott Laboratories centers, USA)

In Vitro Method for Predicting Clinical Hepatotoxicities:
S. Kostrubsky (Pfizer Global Res. and Dev., USA)

In Vitro Human-Based Experimental Systems for Drug Toxicity
Evaluation: A. Li (In Vitro Technologies, USA)

Tailor Made In Vitro Toxicity in Pharmaceutical Industry: Cases and
Strategies: A. Wolf (Novartis Pharma, Switzerland)

Symposium 4 (Wednesday, Oct. 10)
**New Aspects of Hydrolyses and Conjugation
Reactions**

Co-Chair: H. Yamada/ J.O. Miners

Tissue-Specific Regulation of Human Microsomal Epoxide Hydrolase by
Alternative Gene Promoters:

C. J. Omiecinski (Pennsylvania State Univ, U.S.A.)

Cytosolic Sulfotransferases for Endogenous Substrates:
K. Yoshinari (Tohoku Univ, Japan)

Unraveling the Kinetic Anomalies of UDP-Glucuronosyltransferases:
J. Miners (Flinders Univ, Australia)

Arylamine N-Acetyltransferases: From Structure to Function:
E. Sim (Univ of Oxford, UK)

Symposium 5 (Wednesday, Oct. 10)
**Understanding the Plastic (Flexible) Nature of the
CYP Active Sites**

Co-Chair: E. Johnson/ N.P.E. Vermeulen

Plasticity of the CYP2C9 Active Site: Allelic Variation and Ligand
Induced Changes:

E. F. Johnson (The Scripps Research Institute, USA)

Substrate/Protein Dynamics Simulations and Applications:
N.P.E. Vermeulen (Vrije Univ, The Netherlands)

Structure and Function of Cytochromes P450 2B: X-Ray
Crystallography and Solution Biophysical Studies:
J. R. Halpert (The Univ of Texas Medical Branch, USA)

Quantum Mechanical Studies of P450 Catalyzed Reactions:
S. Shaik (The Hebrew Univ, Israel)

Symposium 6 (Wednesday, Oct. 10)
Lipid Homeostasis and Metabolic Regulation

Co-Chair: J.D. Huang/ H. Staudinger

FXR Regulation of Glucose and Lipid Metabolism:
D. Moore (Baylor College of Medicine, USA)

PXR in Lipogenesis:
W. Xie (Univ of Pittsburgh, USA)

FXR/FGF Pathway in Enterohepatic Metabolism:
S. Kliewer (UT Southwestern, USA)

PXR Regulation of Xenobiotic and Bile Acid Homeostasis:
J. Staudinger (Univ of Kansas, USA)

Nuclear Receptor Signaling in Bile Acid Metabolism:
J. Chiang (Northeastern Ohio Univ's College of Medicine, USA)

(タイトルは未確定)

Symposium 7 (Thursday, Oct. 11)
Current Issues on Reactive or Unique Metabolites

Co-Chair: T. Yokoi/ To Be Announced

予定講演内容

A Model System to Assess the GSH Conjugating Activity Using
gclm(-/-) Gene-Targeted Mice:
T. J. Kavanagh (Univ of Washington, USA)

Mechanisms of Acetaminophen Hepatotoxicity: Relevance for
Idiosyncratic Liver Injury:
H. Jaeschke (Univ of Arizona, USA)

Susceptibility Factors for Drug Idiosyncrasy, Inflammatory Stress?
R. A. Roth (Michigan State Univ, USA)

Microarray Analyses: Extrapolation of Clofibrate-Induced RNA
Expression to Human:
K. Manabe (Sankyo Co., Japan)

Symposium 8 (Thursday, Oct. 11)
Interplay of Metabolism and Transport in Drug Disposition

Co-Chair: H. Suzuki/ D. Keppler

Interplay of Conjugating Enzymes with Uptake and Efflux Transporters in the Efficient Elimination of Drugs: In Vitro Studies with Multiple-Transfected Cells:
D. Keppler (German Cancer Research Center, Germany)

Unexpected Interactions between Drug Transport and Phase I and Phase II Drug Metabolism:
T. Friedberg (Univ of Dundee, UK)

Synergistic Role of Breast Cancer Resistance Protein (BCRP/ABCG2) and Sulfotransferases in Regulating the Drug Absorption.
J. Enokizono (Kyowa Hakko Kogyo, Japan)

(以下予定演者)

Interplay of P450 Enzymes and P-Glycoprotein in Drug Disposition.
L.Z. Benet (UCSF, USA)

Role of MRPs in the Sinusoidal Efflux of Metabolites Formed in the Liver: Studies with Mrp3 and Mrp4 Knock Out Mice.
P. Borst (The Netherlands Cancer Institute, The Netherlands)

Symposium 9 (Friday, Oct. 12)
Nuclear Transfactor Interplay

Co-Chair: K. Nagata/ F.J. Gonzalez

AHR: Analysis of the Intrinsic Physiological Function of AhR:
Y. Fujii-Kuriyama (Univ of Tsukuba, Japan)

PXR: Nuclear Receptor: Cross-Talk and Consequences:
P. Maurel (INSERM, France)

Nuclear Receptors CAR and PXR Mediate Xeno-Endo Cross Talk in Hepatic Energy Metabolism:
M. Negishi (NIEHS/NIH, USA)

Analysis of Transcription Factor Interplay Assessed by Adenovirus siRNA:

K. Nagata (Tohoku Pharmaceutical Univ, Japan)

Symposium 10 (Friday, Oct. 12)
New Technology and Bioinformatics in Evaluating and Preventing Drug Toxicity

Co-Chair: T. Ikeda/ G.S. Yost

Glutathione Adducts: Finding and Identifying Electrophiles:
G. Yost (Univ of Utah, USA)

Biomarker Discovery by Metabolome Analysis:
T. Soga (Keio Univ, Japan)

2D Electrophoresis Coupled to MS/MS - Identification of Protein Targets of Toxic Lipid Aldehydes:
D. Peterson, (Univ of Colorado, USA)

Sophisticated MS Techniques Used to Identify Alkylation of Proteins from Prototypical Electrophiles:
D. Liebler (Vanderbilt Univ, USA)

Symposium 11 (Friday, Oct. 12)
For the Committee on Regulatory Affairs: What Determines a Significant Metabolite?

Co-Chair: T. Baba/ S. Wrighton

Safety Assessments of Drug Metabolites:
M. Tohkin (NIHS, Japan)

Case Studies in Pharmaceutical Industries and Perspective:
T. Iwatsubo (Astellas, Japan)

Leveraging Drug Metabolism and Excretion Data in Mist (Metabolites in Safety Testing) Strategies:
S. Obach (Pfizer, USA)

Unique/Major Human Metabolites: Why, How and When to Test for Safety in Animals:
D. Luffer-Atlas (Eli Lilly, USA)

Symposium 12 (Friday, Oct. 12)
Role of Pharmacokinetic Modeling and Simulation in Drug Development

Co-Chair: Y. Sugiyama/ To Be Announced

予定講演内容

PBPK Modeling for Transporter-Mediated Drug Disposition in the Body: Prediction from In Vitro to In Vivo and from Animal to Human.
Y. Sugiyama (Univ of Tokyo, Japan)

Mechanism Based PK/PD Modeling:
M. Danhof (Leiden/Amsterdam Center for Drug Res, The Netherlands)

Clinical PK/PD Studies for the Validation of Biomarkers as Surrogate Endpoints:
A. Hisaka (Univ of Tokyo, Japan)

Use of Population PK/PD Analysis in the Drug Development:
N. Holford (Univ of Queensland, Australia)

Role of PK/PD in Drug Approval and Drug Development:
R. Stanski (Novartis, USA)

Plenary Session

Wednesday Morning, Oct. 10

Frank J. Gonzalez

Chair: Erin G. Schuetz

Thursday Afternoon, Oct. 11

Urs A. Boelsterli

Chair: John Caldwell